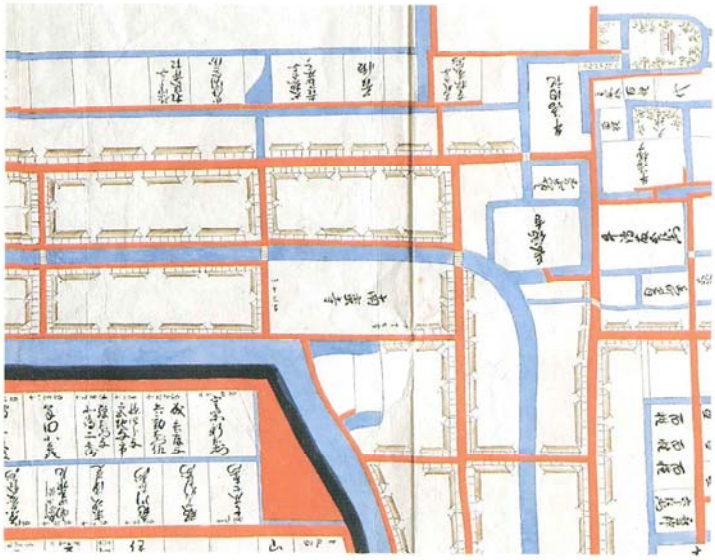
十　弾圧に負けなかったキリシタン

―佐賀藩とキリスト教―



慶長佐賀城下図（慶長御積絵図）（鍋島報效会蔵）

上の図は、一六〇九年（慶長一四）に作成された「慶長佐賀城下図」（慶長御積絵図）といい、江戸時代初期の佐賀市内のようすを表したものです。この図の中央部に南蛮寺というのがあります。ここは現在の佐賀市柳町にあたるところで、一六〇七年に建てられた教会だといわれています。

日本でのキリスト教の歴史についてみてみると、一五四九年にフランシスコ・ザビエルが鹿児島にやってきて、教えを広めたのがその始まりです。それ以後、織田信長をはじめとする多くの大名の保護もあってキリスト教は全国に広まりました。大名の多くはキリスト教そのものよりも南蛮貿易で利益をあげようとこれを保護したようです。

特に、九州にはキリシタン大名と呼ばれ、自らキリスト教を信じた有馬晴信・大村純忠・大友義鎮などがおり、最もさかんな地域であったといえます。しかし、佐賀のキリスト教の歴史をみてみると、他地域に比べて遅く、キリスト教を広める宣教師が初めて佐賀にやってきたのは一五八

一年でした。日本にキリスト教が伝わって実に三〇年以上たっていました。

では、どうして佐賀にキリスト教が伝わるのがこのように遅れたのでしょうか。その理由としては、九州のキリシタン大名であった有馬氏・大村氏・大友氏が、佐賀を支配していた龍造寺隆信と敵対関係にあったことがあげられます。大名たちは南蛮貿易で隆信の勢力が大きくなることを恐れ、宣教師が佐賀藩に行かないように様々な噂を流したのです。そのため、宣教師は佐賀にあまり近づかなかったようです。

このように、他の九州諸地域と比べると遅れて入ってきたキリスト教ですが、龍造寺氏の後、佐賀を支配した鍋島直茂・勝茂親子の保護もあって急速に広まりました。佐賀市内の高伝寺にある勝茂の墓の隣には聖母マリアを刻んだキリシタン灯籠といわれるものがあり、勝茂とキリスト教の深い関係を知ることができます。

キリシタン灯籠（佐賀市本庄町高伝寺内）

鍋島勝茂画像（高伝寺蔵）

では、佐賀でのキリスト教の広まりについてみてみましょう。

日本に伝わってきたキリスト教には、ザビエルに代表されるイエズス会※とドミニコ会※とよばれる2つのグループがあり、どちらも積極的に活動したことが伝えられています。

まず、イエズス会の活動としては、一六〇〇年に当時佐賀藩の領地であった深堀（長崎市）で六百人がキリシタン（キリスト教徒）

最初の教会跡の記念碑（鹿島市浜町若宮神社内）

になったことが始まりでした。同じ年には諫早（長崎県）で領主が教会のために土地を寄進し、翌年には佐賀城下で二百人がキリシタンになるなど急速に広まっていきます。その後は、不動山（嬉野町）・須古（白石町）・佐賀城下にそれぞれ教会を建て、教えを広めていきました。

一方、ドミニコ会は一六〇六年に藩主鍋島勝茂の許可を得て、翌年に浜町（鹿島市）に教会を建てたことが始まりでした。現在も浜町には最初の教会跡の記念碑が残っています。そして、一六〇八年には鹿島城下・佐賀城下にそれぞれ教会が建てられました。最初に述べた「慶長佐賀城下図」の南蛮寺は、この年に建設された教会です。

その後、教えはさらに広まり、当時、佐賀にきていた宣教師の手紙の中には「肥前国（佐賀）においては、現在（一六〇九）、キリスト教のすべてはさかんになり、多数の異教徒がわれわれの信仰に改宗し、キリシタンは平和を楽しんでいる。」と書かれていました。

しかし、キリスト教の拡大などを恐れた幕府は、一六一三年全国に禁教令を出し、キリシタンの取り締まりと宣教師の追放を命じました。その後、全国各地の宣教師が追放され、多くのキリシタンが取り締まりをうけました。

絵踏みのようす

佐賀でも同様に多くのキリシタンが弾圧されています。

「勝茂公年譜」という佐賀藩の記録にキリシタン弾圧の事が書かれています。嬉野不動山の四郎衛門というキリシタンが捕まり、江戸に送られることになりました。彼は途中で死にましたが、その死体はわざわざ塩漬けにされて、江戸まで送られたということで、当時の弾圧がどれほど厳しかったかがわかります。

嬉野町不動山周辺には現在も多くの史跡が残っています。野添史跡には「子捨谷」といわれるところがあり、ここは逃げるキリシタンが足手まといになる子供をすてた谷であると伝えられています。また、「馬場之子屋敷跡」はキリスト教がさかんだったころの「子供の家」の跡といわれており、キリシタンが「子捨谷」ですてられた子供たちを焼いたところだとも伝えられています。

その後も、「絵踏み」・「※宗門改め」・「寺請け制度」など弾圧は続き多くのキリシタンが信仰をすてました。しかし、「かくれキリシタン」とよばれ、キリスト教をすてなかった人々もいたのです。佐賀でも東松浦郡の馬渡島・松島などに記録が残っており、前に述べた不動山の「馬場之子屋敷跡」では江戸時代から明治時代ごろまで、クリスマスである十二月二十五日に村人が集まり祝宴を開いていたということが伝えられています。

キリスト教を信じた人々は江戸時代の二百五十年もの間、さまざまな取り調べや弾圧にも負けないで、ひそかに自分たちの守り続け、受け継いできたのです。

「馬場之子屋敷跡」（嬉野町不動山）